

媒体名：読売新聞都民版

日付：2006年6月29日

和太鼓の魂 ブラジルに伝えたい

昨年ブラジルで行われた太鼓教室で、真剣な表情で太鼓を打つ生徒（渡辺さん提供）



都内を拠点に活動をする和太鼓の演奏家で「太鼓集 団 天邪鬼」代表の渡辺洋一さん(47)が、来月から約1か月の予定でブラジルに滞在し、日系人の子供たちに和太鼓を指導する。渡辺さんは、「日本のソウルビート(魂の響き)を伝えたい」と楽しみにしている。

来 月

演奏家・渡辺洋一さん

日系の子供を指導

渡辺さんのブラジルでの指導は、今回が3回目。2003年に設立されたブラジル太鼓協会に招かれ、現地の子供たちに太鼓を指導した。今回は、小学生から高校生までを対象にした教室が、サンパウロ、ジュンジャイ、マリンカの各市で開かれる。

ブラジルでは、2008年に日本人の入植100年を迎え、様々な記念行事が予定されているという。同協会などは、現地の子供など大人数による和太鼓演奏を計画しており、渡辺さんの指導にも力が入る。

日本の伝統的な和太鼓に必要なのは、「心・技・体・ブラス礼」(渡辺さん)。これまでの指導では、日本流の礼儀作法をよく知らないブラジル生まれの日系3、4世の子供た



渡辺洋一さん

ちに、自分たちで道具を準備させ、お辞儀、正座からバチの持ち方まで、基本を教えた。今回は、指導と共に日本太鼓連盟の検定を実施する予定で、入植100年祭に向けたレベルアップが目標だ。

渡辺さんは、「ソウルビートを伝えるには、自分が太鼓の一部にならないといけない」と話す。単に太鼓をたたいて音を出すのではなく、リズムを打つ時の息づかいなども重要な要素なのだという。

ブラジルでの指導の際は、子供たちにも腕立て伏せなどの筋力トレーニングを課しているが、「みんな目を輝かせて、一生懸命練習する」。そんな姿を、渡辺さんは「日系人である自分のルーツを探しているのではないかと見受ける。高価な和太鼓をブラジルで入手するのは難しく、現地で使用されているのは、塩ビ製の太い筒に牛の皮を張ったお手製の太鼓だ。それでも、練習を重ねて行くにつれ、子供たちの太鼓の音は、「たたく」だけの音から、「打つ」音に変わり、様々な響きを表現するようになっていく。渡辺さんは、「日系人に生まれたからには、ぜひ受け継いでほしい」と話している。

(有)太鼓集団天邪鬼

〒177-0035 東京都練馬区南田中 5-9-11-101

TEL:03-3904-1745 FAX:03-3904-9434 E-Mail: taikoshudan@amanojaku.info

http://amanojaku.info